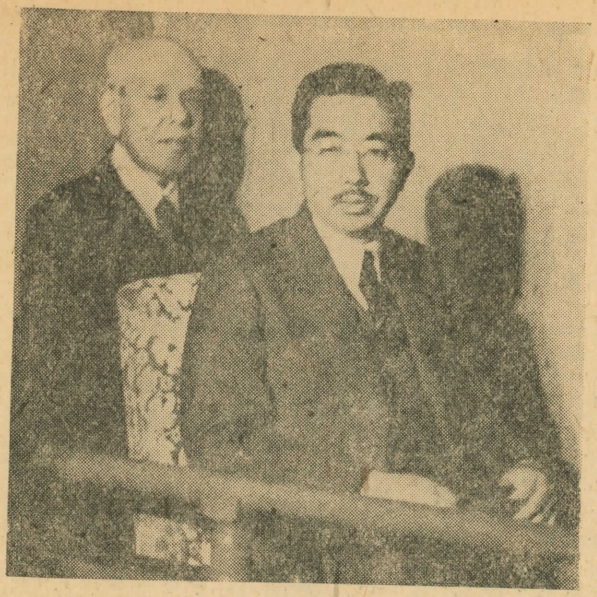
天覽文樂を陪觀して

南木淑郎



關西四府縣をお巡りになつた天皇陛下が、東京へお還りになる前日の六月十四日、文樂座へおいでになつた。

御多忙な十日間の御日程の中からわざわざ御觀劇のひとときを割かれたことは、この文化財の世界性に御關心を寄せられたものとして、まことに意義ふかいものがあつたといへるだらう。

何分前例のないことだけに當の文樂座はもとより、招待役の府市當局の力の入りやうも一通りでなく、殊に陪觀者の人選については府市當局がほとんどこれにあたつた結果、客席はお役人やその關係者たちで埋まり、その中へ折から西下中の片山首相ほか六閣僚までとびこんで、すつかり場内の空氣はかたくなり、これが劇場だつたのかといふかしくなるくらゐ。おのづからエチケットも度が過ぎて折角の雰圍氣も壞されるのではないかと心配してゐる矢先、氣を利かせたか中村府社會教育課長が、陪觀のお作法について一くさりのべ、客席の一同に注意を促した。

×

さて、お着きの合圖のベルが鳴つて陪觀者一同起立、二階便殿に入られた陛下は當日の御説明役高安六郎博士と白井松竹會長から人形淨瑠璃の説明をおきゝになり、間もなく東棧敷の御座席にお着きになつた。高安博士は陛下のうしろに少し離れて腰をおろす。待ちかまへてゐた新聞社のカメラをお浴びになつてゐるうちに、はや柝が入り、開幕の拍手がおこる。ふと御座席の方を見ると、陛下もさかんにお手を叩いてをられる。

舞台は、文五郎以下の演ずる「重の井子別れ」、清六の三味線にのつて山城少掾の澁い調子が場内のすみすみまでしみわたるやうにひゞく。陛下はじつと舞台にお目を注がれたまゝ、しばらくこくりこくりとうなづいてをられたが、やがて佳境に入るにつれてそれもおやめになり、その後は身じろぎひとつされず、うしろにひかへた高安博士も全く手持無沙汰のかたち。靜まりかへつた場内に惻々として迫る紋下の語り口はますます熱を帶び、やがて哀調の馬子唄に胸も裂かれる人形の至藝、陛下のお顏もほんのり紅潮して、客席の婦人の中にはハンカチーフをとり出すものも出る。太夫も三味線も人形も名人藝をこゝに集めて、息もつがせぬ三十五分間だつた。

幕とぢて陛下はお席をお立ちになり、便殿

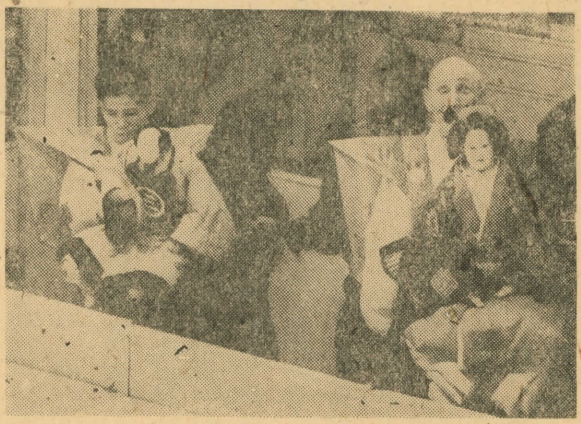
で五分間御小憩、ふたゝび御席にかへられるころはすつかり場内の空氣も暖まり、こんどはぐつと趣向をかへて華やかに「千本の道行」が幕をあける。一人でも多く出演出來るやうにと、床から舞台へかけて目白押しにならんだ太夫、三味線の賑やかな演奏の中に紋十郎の遣ふ「靜」と玉助の「忠信」が織りなす絢爛の夢幻劇。陛下も恍惚としてごらんの樣子だつたが「靜」がうしろ向けに投げた扇子を「忠信」がばつしと受けとめるや陛下は眞先に御喝采になり、場内もしばしどよもした。前日の舞台稽古で何度も何度も練習を重ねた甲斐あつて、危いケレンを封じ切り拔け、「靜」も「忠信」もほつとしたやうに舞ひ納めた。

ものの一時間、古典の舞台に魅せられてすつかり胸もなごみ、今更のやうに人間的共感を催した陪觀の人々はいつの間にか陛下への親しさを深めてゐた。

陛下が御退席の際には社會教育課長の提案どほり割れるやうな拍手がおこつた。拍手をもつて陛下をお送りすることはかつてなかつたお作法だつたが、それは少しも不自然でなく、かへつてこの場合陛下への感謝と敬愛をあらはすにはこれ以上の表現はないとさへ思はれた。

このあとで陛下は文樂座を代表する紋下豐竹山城少掾、鶴澤清六、吉田文五郎の三人の出演者を御引見になつた。

陛下がお立ちになつたあと、記者たちはこの日おことばを賜つたこれらの人たちに會ひ、陛下の御樣子の一部始終をきいた。この日の陛下の御下問は、最初白井會長が人形の構造について說明申しあげた際「人形の目は誰が動かすのか」といふ一事だけだつたが、



この藝術の成り立ちや、これだけに仕上げる修行のむつかしさにはつくづく御感嘆になり、「それは大變だな」といはれ、便殿に飾つてあつた獻上の「靜」の人形を熱心にごらんになつた。また御觀劇の最中、こゝぞと思ふ箇所では何度もうなづかれたよし、陛下のおつむばかりをながめてゐた高安博士は、その御理會のふかさに感心してゐた。三名人御引見の際には白井會長が「七十九才の文五郎、七十才の山城少掾、二十五年間合三味線をつきあつた清六」と御紹介申しあげたが、陛下はお氣輕に「けふは大へん結構な藝術を見せていたゞいてありがたう」とねんごろにその勞をねぎらはれた。三人の感激はいふまでもなく、殊に二三日來の風邪で前日の舞臺稽古には大事をとつて休養した文五郎のよろこびはたとへやうもなかつたらう。

×

私はこのたびの行幸に際し、いたるところで御視察のお邪魔をした新聞記者のひとりだが、ともすれば殼を脫ぎきれず、かみしもをつけてお迎へする人々に對して陛下はとくにお氣輕に胸をひらかれ、ものやわらかな御口調をとられるのを度々拜見して、陛下の御意思の在り場所をはつきり知つた。

この意味から陛下を文樂へお誘ひしたことは、世情への御理解を一層おふかめするまたとない御機會だつたと拜察して、心ひそかにおよろこびしてゐる次第である。

寫眞說明＝文樂御觀覽中の天皇陛下（文樂座東棧敷）その後は御說明役の高安吸江博士（每日新聞社寫眞部謹寫、提供）と當日の「重の井子別れ」右は文五郎の重の井、左は紋司の三吉